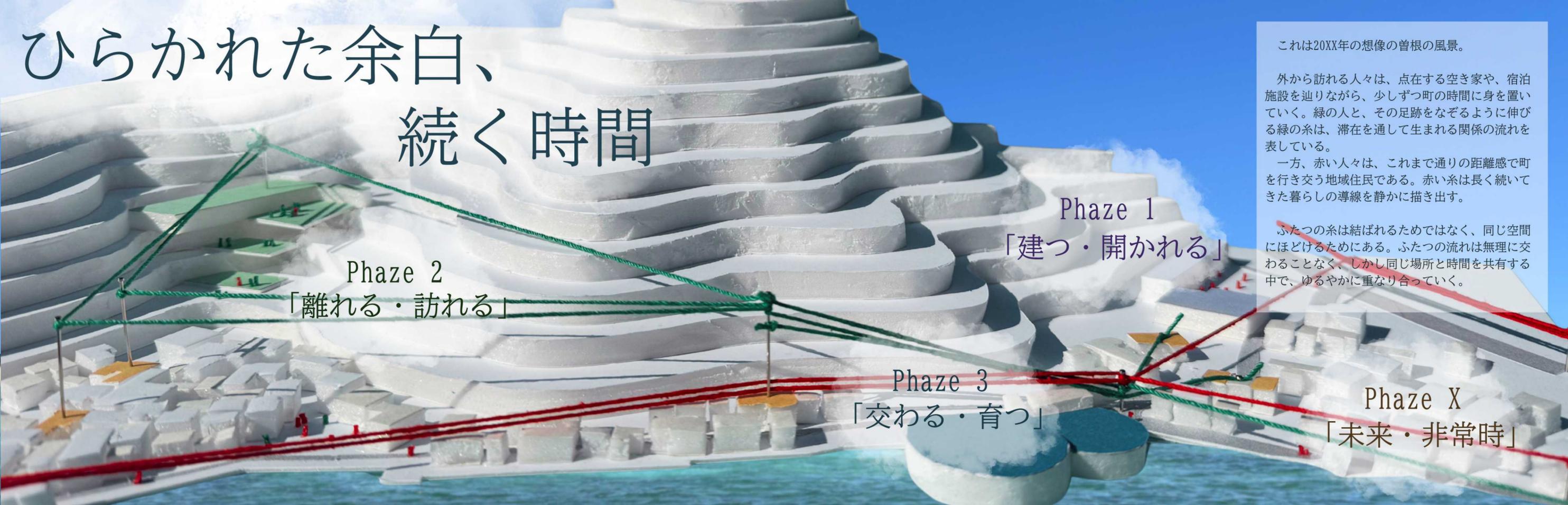


# ひらかれた余白、 続く時間



これは20XX年の想像の首根の風景。

外から訪れる人々は、点在する空き家や、宿泊施設を辿りながら、少しずつ町の時間に身を置いていく。緑の人と、その足跡をなぞるように伸びる緑の糸は、滞在を通して生まれる関係の流れを表している。

一方、赤い人々は、これまで通りの距離感で町を行き交う地域住民である。赤い糸は長く続いてきた暮らしの導線を静かに描き出す。

ふたつの糸は結ばれるためではなく、同じ空間にほどけるためにある。ふたつの流れは無理に交わることなく、しかし同じ場所と時間を共有する中で、ゆるやかに重なり合っていく。

## 1. Site 一宇和島市 津島町曾根一

計画地である曾根は南予地域の、山と海に囲まれた、人の数が多くない地域に位置している。

- ・区域人口：約100人
- ・区域面積：約18.58ha
- ・特色産業：漁業、水産業

曾根小学校は平成24年3/31廃校

## 2. 設計主旨

### 1 課題

#### A. 数字が示す南予の現在

近年、南予地方では少子高齢化および人口減少が加速しており、深刻な地域課題として問題視されている。特に愛媛県南予地域の高齢化率は約42%に達しており、県内でもとりわけ高齢化が進行しているエリアである。

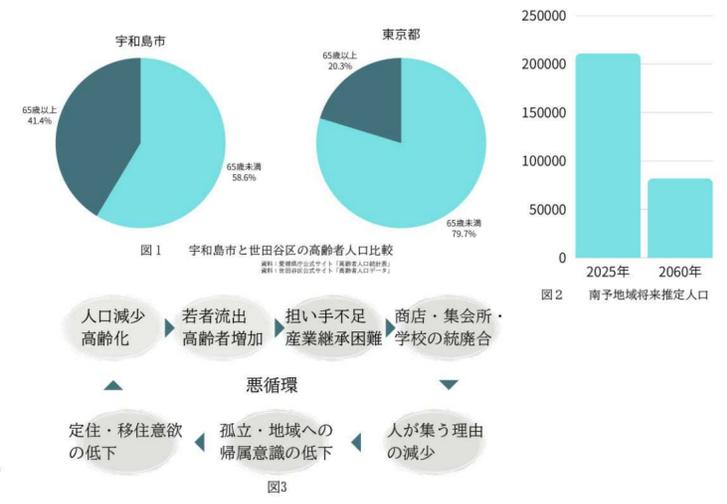
実際に、東京都世田谷区と愛媛県宇和島市の高齢者人口を比較すると、図1に示すように、宇和島市における高齢者の割合は世田谷区のおよそ2倍に及んでいることが分かる。さらに将来推定人口に着目すると、南予地域では人口減少が著しく、図2のように2060年には現在の約2割弱まで急減すると予測されている。

#### B. 人が減ることで失われていくもの

このような人口動態の変化は、地域産業の継承困難や高齢者の孤立を招くだけでなく、「住み続けたい」「移住したい」と感じられる環境づくりを難しくし、図3に示すような悪循環を生み出している。

#### C. 人が集まる理由の喪失

人が集まらなくなった結果としての衰退ではなく、**人が集まる理由そのもの**が失われていく過程こそが、現在の南予地域における本質的な問題であると考えられる。このような状況の中で、地域における人と人とのつながりや、安心して滞在できる居場所の再構築が求められている。



## 2 提案

課題点をより深く把握するため、宇和島市内の公共施設にアンケートを設置し、10~30代の計80名から回答を得た。

### アンケート結果

—ほしい施設—

- ・遊ぶ場所 (39%)
- ・飲食店 (20%)
- ・勉強できる場所 (14%)
- ・買い物できる場所 (8%)
- ・滞在、休憩できる場所 (8%)

—不便なこと—

- ・商業施設の偏り
- ・娯楽施設の不足
- ・異文化交流の場の不足

—他にない良いところ—

- ・都会すぎず田舎すぎない
- ・食べ物が美味しい
- ・地域の人が温かい
- ・星がきれい
- ・自然が豊か
- ・水産業が盛ん
- ・空気がきれい

他国から観光に来る人との交流をきっかけに地元の魅力に気づけるんじゃない？

天然のプラネタリウムがほしい…！

文化学習機能とか子育て支援施設があればな…

### 1. アンケートから見た地域のニーズ

アンケート結果から、多くの回答者が娯楽施設の充実を求めていることが明らかとなった。これは、南予地方全体において、日常的に利用できる娯楽施設の選択肢が限られていることが原因のひとつであると考えられる。また、自由記述欄からは、特定の目的を持たずとも立ち寄れる場や、異文化交流を求める声も見られた。これらの結果から、南予地域では「行き先がない」のではなく、「**行く理由が生まれてくれない環境**」にあることが課題であると捉えた。

### 2. 人が集まる理由をつくる居場所

本計画ではまず、地域内において**人が集まる理由そのもの**を新たにつくること、そして外から人を受け入れるための土台を形成することを目的とした。ここで目指すのは、人を強く引き寄せる抽象的なランドマークではなく、地域に暮らす人々をも静かに受け入れる居場所である。そのような場をつくることで、これまで点在していた人々の存在や活動が無理のないかたちでゆるやかにつながっていくことを意図している。「田舎=何もない」という否定的なイメージではなく、「**余白がある環境**」として捉えなおす。

### 3. 巡ることで育つ関係

建築する施設は3つに分棟した。建物を分散させることで、外から訪れる人と町との関係がよりゆるやかに結びつき、敷地内外を巡りながら体験する**回遊性の創出**が可能になると考えた。

本計画は、周辺住民にとっては日常の憩いの場となり、同時に地域外から訪れる人々を受け入れる場として機能する。世代や国文化、地域内外といった境界を越えて、人と人との関係がゆるやかに生まれ、**重なり合う空間**の創出を提案する。

# 3. 持続可能な地域創生までの過程

愛媛県内の地方では若者や住民が外に流出してしまう傾向にある。またUターンで愛媛に帰ってきたり、Iターンとして引っ越してきたりしても、県内の比較的都市部の市に住むことが多い。それは愛媛の地方に帰ってくる、訪れる理由が多くないのが原因であると考えられる。しかしこの状態のまま20年、30年、40年と時間が過ぎれば、こういった地方は住む人が居なくなり、消滅してしまう。地方が消滅するという事は、その場所特有の良さも消えてしまうということである。施設や人が少ないからこそその**落ち着きや静けさ**が存在したり、近所づきあいや町内での関わりが持てたりする、などといった地方ならではの良さを最大限に活かし、持続可能な地方の構築を目指す。

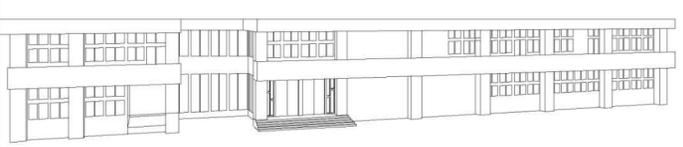
## Phaze 1 「甦る・開かれる」 よみがえ

**拠点が生じ**  
こうせい  
地域住民の日常の延長として使われ始める。

地域住民が日常的に立ち寄り、思い思いの時間を過ごす場として機能する。特別な目的を必要とせず、ただ居ることが許される空間であることで、自然と人の存在が重なり合い、顔見知りの関係が生まれていく。このPhazeでは意図的な交流を促すのではなく、**同じ時間や空間を共有**することを通して、地域住民同士のゆるやかなコミュニティが形成され、住民間のつながりが少しずつ深まっていく。

→静かな日常 無理のない空間

主に旧曾根小学校を活用し、地域住民間のつながりをより深める。親子同士や世代を超えた様々な交流によって新しい関係性を目指す。



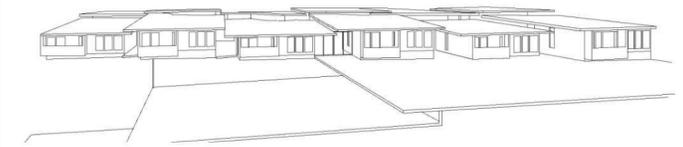
## Phaze 2 「離れる・訪れる」

日常から距離をとる場として  
外から訪れる人が少しずつ増えていく。

地域外から訪れた人々がこの場を通して南予の環境や暮らしの魅力に触れるPhazeを想定する。建築や周囲の風景、地域の人々の過ごし方の触れることで、観光的な消費にとどまらない、生活に近い南予の姿が伝わっていく。一時的な滞在をきっかけに、「住んでみたい」「かかわり続けたい」という意識が芽生え、結果として定住や継続的な関係へとつながっていくことを目指す。

→知る 感じる 関わり始める

主にやどりの山を舞台に観光客が訪れ、そこで過ごすなかで曾根の良さを知ってもらう。



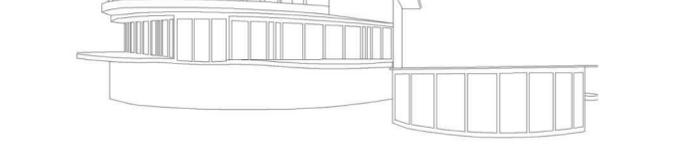
## Phaze 3 「交わる・育つ」

人の流れが交わり  
地域内外の関係がゆるやかに育ち始める。

地域住民と外から訪れる人々が、この場を介して関わり合い、互いの存在を認識し合う関係へと発展していく。日常の延長にある小さな会話や活動を通して、年代や背景の異なる人同士が無理なく交わり、それぞれの価値観が重なっていく。このPhazeでは、明確な**役割や目的を持たない関係性**が許容されることで、地域内外を越えた新たなつながりが育まれていく。

→混ざる 重なる 関係が育つ

ひらき場が近隣住民にとっては娯楽の場、観光客や移住希望の人にとっては満喫する場、地域住民と関わる場として機能する。



## Phaze X 「未来・非常時」

人が増えても  
曾根の静けさや余白が守られ続ける。

これまでに生まれた人と人との関係や活動が、この場を起点として地域全体へとにじみ出していく状態を想定する。特定の使い方に固定されることなく、時代や人の入れ替わりに応じて、用途や意味が更新され続ける。空き家であった建築は、**人の活動を受け止める器**として再び地域に根付き、南予における暮らしや関係性の一部として、長い時間軸の中で存在し続ける。

→未来 更新 固定しない

今ある資源を最大限に活かし、地方の活性化を目指す、このような仕組みが活性化につながる事例となれば、この曾根町だけに留まらず、南予地域、四国、全国へと広がるだろう。




### 1 空箱の活用

過疎化が進む地方では、既存建物の空箱化が進行している。そこで特に目を向けたのは小学校の廃校舎と点在する空き家の存在である。それらを活用することで経済負荷や環境に配慮しながら、既存財産の保護、継承を目指すことができる。実際に計画の要素となったのは、旧曾根小学校の校舎と地区内に約10軒存在する空き家である。

旧曾根小学校はリノベーションを行い、よりあいの校へと甦らせ、地域住民にとっての新しい居場所、集まる場所を計画した。旧小学校は近隣住民にとっての思い出が詰まっている場所であり、この場所を何十年先の未来までのこすことのできるような地域の拠点を目指した。

地域に点在している空き家は改修し、移住を検討している人の仮住まい、また、移住を決断した人の住居として機能する。

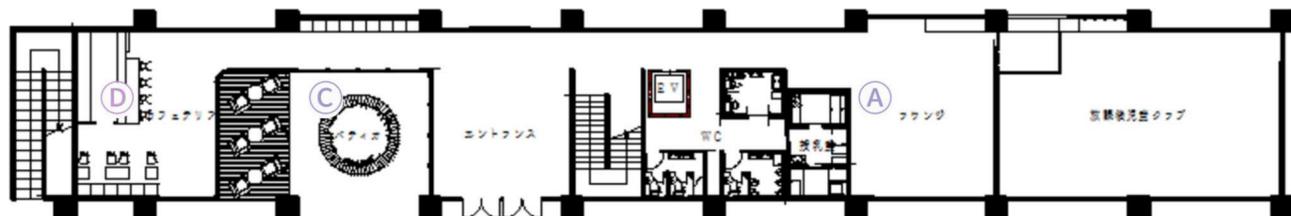
# よりあいの校

平成24年3月31日に廃校となり、現在も活用のめどが立っていない曾根小学校を対象に、既存校舎ををリノベーションし、地域内外の人々が年代や国籍、文化の違いを越えて関係を育む場へと再生することを本計画の目標とする。

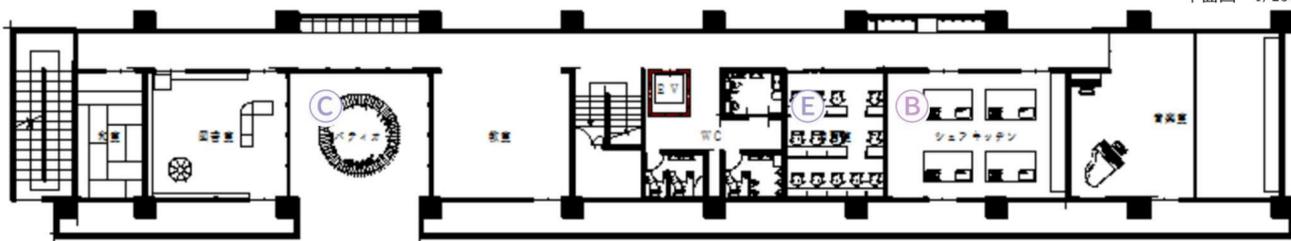
宇和島市役所の方々の協力を得て、昨年8月に実際に曾根小学校の校舎内を見学した。校舎内には、教室に椅子や机が残されているほか、図書室には多くの書籍、音楽室にはピアノやアコーディオン、金管楽器、打楽器など様々な楽器が当時のまま残されていた。また、教室には非常用ベッドや非常食を備えた段ボールが設置されており、曾根小学校が現在も近隣住民にとって災害時の避難場所として想定されていることが分かった。加えて、グラウンドや体育館は、現在も地域住民に利用されている様子が見られた。

これらの現状を踏まえ、本計画が地域活性化へとつながる事例となれば、曾根小学校に限らず、全国に点在する廃校の新たな活用可能性を広げる1つの指針となると考える。

曾根小図面 1/250



平面図 1/250



## A. 日常ににじむラウンジ

ここは、用途を限定せず自由に過ごすことのできるラウンジとした。勉強や読書、会話など、それぞれの目的や気分に応じて思い思いに滞在できる場である。



## B. 記憶を受け継ぐ食の場

かつて調理室であった教室は、地域にひらかれたシェアキッチンとして再生した。郷土料理教室やレクリエーションを定期的で開催し、親子や高齢者と児童など、世代を超えた人々が協力して料理を作ることで、交流を生み、地域や郷土料理への関心を深める場とする。



## C. 時間を共有する庭

東側に向かって開放的なパティオを設け、中央にはシンボルツリーを植える計画とした。このパティオは、1階のカフェテリアとエントランス、2階の図書室および教室に囲まれた位置にあり、各階から常に木の存在を感じながら、それぞれの活動を行うことができる空間となっている。



## D. 集うカフェテリア

エントランスから左へ進み、パティオに面した後廊下を抜けた先にはカフェテリアが広がる。ここではドリンクや軽食を提供し、会話を楽しみながら勉強やテレワークなど、それぞれが思い思いに過ごすことのできる場とした。



## E. 集中のための部屋

2階の理科室であった一角は自習室として計画した。座席数は13席とし、静かで落ち着いた環境の中で、勉強や作業に集中できる場としている。



## D. その他の活用

### 体育館

体育館は現在でも、たびたび近隣住民に利用されており、災害時には避難場所としても利用される場所である。そこで、災害時に備え、南予の鬼北町で製作されている泉貨紙を使用した、軽量であり個室の作成が容易な間仕切りを提案する。

泉貨紙：楮を原料として作られる、非常に丈夫な和紙



### 運動場

運動場も現在、ゲートボールのゴールポールやサッカーのゴールが設置されていることから、利用されていることが分かる。その点を利用し、運動場を憩いの場とし、年代にとらわれず思いきり遊ぶことのできる場として活用する。



# 空き家活用計画

## 1 現状



### A. 空き家問題の顕在化

近年、空き家問題は全国的な社会問題へと発展している。人口は減少しているが、空き家の件数は増加している。地域の過疎化が加速する中で、今後も空き家は増加していくと考えられる。

### B. 放置によって生じるリスク

空き家が放置されることにより、建物は住み手を失う。適切な管理が行われなくなることで老朽化が進行し、倒壊や火災、不法侵入などのリスクが高まる。これらの問題は、隣接する住宅や周辺環境へ影響をおよぼす危険性を孕んでいる。



### C. 地域環境への影響

建物の劣化や損傷は地域の印象や価値を低下させる要因ともなりえる。これによってさらなる人口流出や空き家増加につながる悪循環を生み出す。このような問題が指摘されているが、十分な対策が行き届いていない。

### D. 解決困難にする構造的課題

行政の立場では、税収の減少が進む中で、空き家対策にかかる費用の増大が財政的な負担となっている。一方、空き家の所有者にとっても、建物の維持管理にかかる労力や費用、精神的負担が大きく、対応が困難となっている場合が多い。立場ごとに異なる問題が存在し、それらが複雑に絡み合い、問題は根本的な解決に至っていないと考えられる。

空き家を「管理すべき負の存在」ではなく、ふたたび人の活動を受け入れる器として捉え直す

## 2 計画

### 1. お試し居住から定住へのプロセス

移住を検討する人が抱える生活環境や人間関係への不安に対し、地区内の空き家を活用した仮住まいを2軒程度整備する。観光ではなく暮らしの延長として地域を体験できる場とし、一定期間の滞在を経て移住を決意した場合には、将来的に住む空き家を自ら選択し、仮住まいで生活を続けながら、リノベーションを行う仕組みとする。

### 2. 発信からはじまる空き家活用

近年、動画配信やSNSを通じた情報発信は、暮らし方や価値観の共有において大きな役割を担っている。本計画ではその影響力に着目し、空き家をリノベーションしていく過程そのものを1つの企画として発信する取り組みを提案する。改修の様子に加え、地域住民との交流や完成に至るまでの時間の積み重ねを可視化することで、空き家活用や地方移住に対する心理的なハードルを下げ、地域の認知向上や関係人口の創出につなげる。

### 3. 主体性を育てる空き家活用の仕組み

空き家を単に住居として再生するのではなく、行政による支援と、移住者や地域住民の主体的な関わりを結びつけることで、持続的な活用を目指す。自らの手で空き家を改修する経験は、住まいへの愛着や地域への帰属意識を育み、「住み続けたい」という意識を自然に生み出す。

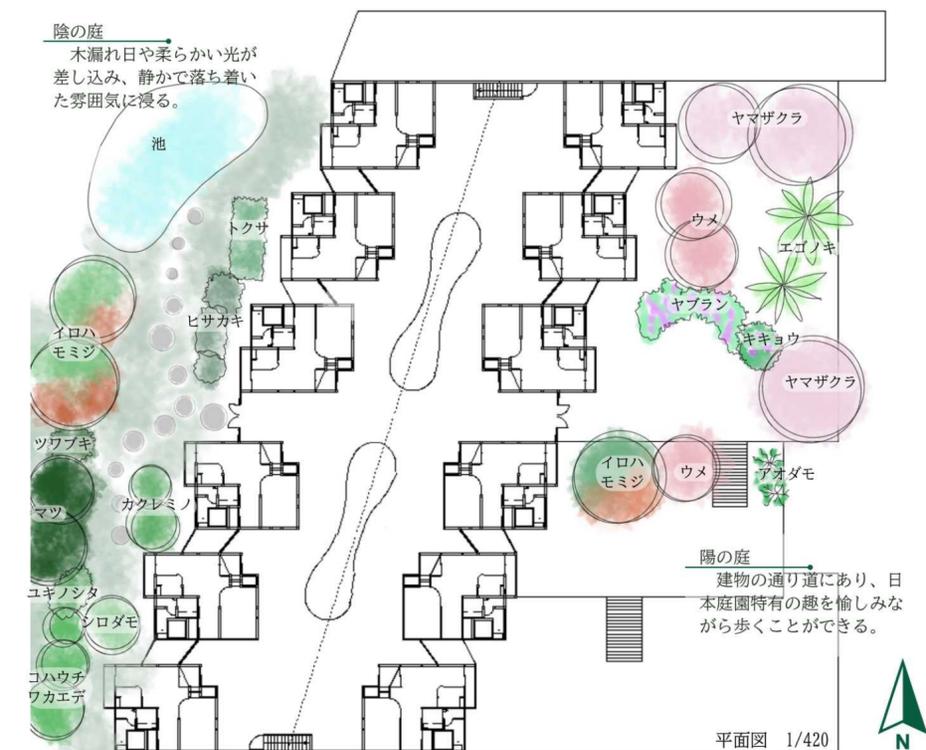
### 4. 時間とともに広がる地域再生

本計画は仮住まいから定住へ、個人の取り組みから地域全体へと段階的に広がることを前提としている。空き家は点としてではなく面的に活用し、人の循環によって自律的に続いていく状態を目指す。何年後も見通しながら、地域とともに成長していく計画として位置づける。



# やどりの山 ー山中施設ー

ここは、観光客や移住を検討する人々が滞在し、地域での暮らしを体験するための宿泊施設である。山の傾斜地に建つ立地を生かし、曾根の町や海を見渡せる眺望を確保することで、日常から離れた静かな時間を過ごせる場とした。



## 陽の庭と陰の庭

西側には建物と山に挟まれた影の庭を設け、直射日光を避けながら、時間帯によってやわらかな光が差し込む静かな空間とした。一方、東側には朝日を受ける陽の庭を配置し、滞在の始まりを感じられる明るく感じられる明るく開放的な外部空間とした。それぞれの庭では、日照条件に適した植栽を施し、光と時間の違いを体験できる計画としている。

## 1 ダイアグラム

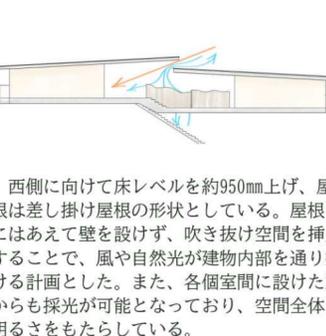
基本形である箱の形のままでと砂防ダム部分の主張が激しい。また、日当たりも悪く眺望も悪い。



## 2 収穫するアメニティ



## 3 日照と風通



# 災害時の対応

いつか起こる災害時には地域の住民が安全に避難でき、一時的な被災時でも安心して生活することのできる、避難・防災計画を立てた。



## A. 津波災害時

津波発生時には、沿岸部において約5~10mの津波が到達する可能性が想定されており、集落の約7割の範囲が同程度の浸水被害を受けると考えられている。従来、避難所として指定されている曾根小学校の敷地においても、最大で約3m程度の浸水が予測されており、十分な安全性が確保されているとは言い難い。そこで本計画では、従来の避難所機能に加え、山中施設を津波災害時の新たな避難所として位置付ける。山中施設は床面が地上から約16m弱の高さにあり、想定される到達範囲を上回るため、津波災害時においても安全な避難先となる。

## B. 土砂災害時

曾根町の山側斜面には、砂防ダムが一基設置されており、地域住民の生命を守る役割を果たしてきた。一方で、その無機質なコンクリートの存在は日常的に心理的な圧迫感を与えているとも感じられる。本計画では、宿泊施設に砂防ダムとしての機能を一部担わせることで、安全性を確保しながら、日常的には人が集い憩う場として再構築する。山崩れ発生時には施設が盾となり、山麓に広がる集落の被害を軽減させる。また、利用者の安全に配慮し、砂防機能を担う壁体と客室部分の間には、エキスパンションジョイントや防震ゴムを設けた。土砂災害発生時には、海上施設への非難を想定している。

# ひらき場 ー海上施設ー

ここは道路に接する海上に建つ滞在型交流施設である。地域住民が気軽に立ち寄り、住民同士の関係を育む場であると同時に、観光や移住を目的に訪れた人々が、日本文化や曾根の魅力を体験する場としても機能する。日常と非日常がゆるやかに重なり合う、地域に開かれた拠点を目指した。



## 土地の恵みに浸る

大浴場  
サウナをはじめ、不整形や傷などで廃棄されるはずのみかんを活用したみかん湯、同様に品質上の理由から廃棄される真珠由来の成分を使用したパール風呂、寝転び湯、樽風呂、曾根の海から取水した海水由来の潮湯など、多様な種類の湯を設けた。また、湯の温度をぬる湯とあつ湯に分けることで、入浴文化や好みの違いに対応している。露天風呂は海側に配置し、広がる海の景色を一望できる空間とした。

## 開かれた滞在の入り口

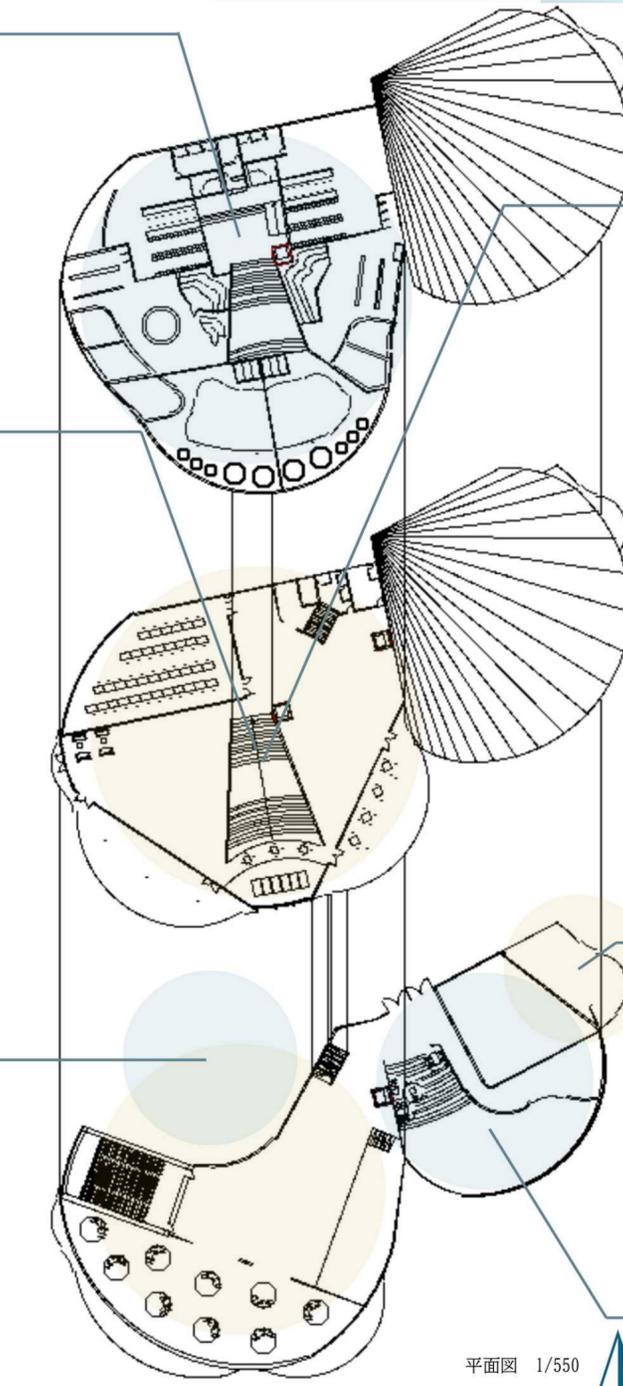
ラウンジ / 映画館 / コモリの間  
建物に入って右に進むとすぐにラウンジ空間が広がる構成とした。ここは訪れる人が特定の目的を持たずとも、ふらりと立ち寄ることのできる開かれた場としている。ラウンジを抜けた先には、収容人数90人の映画館を配置し、さらにその奥にはコモリの間が広がる。テント内では読書や映画鑑賞など、個々の時間を過ごすことができる。

## コモリの間

海の水面をイメージした起伏のある床面の上に、一基につき1~4人が利用可能な直径2250mmのドーム型テントを9基点在させた、静かに人がこもるための空間。

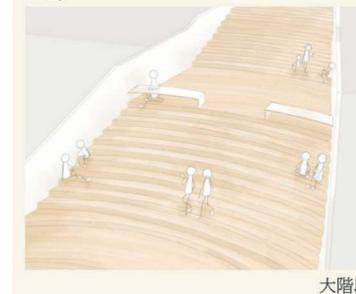
## 街に開く余白

北西側において建物の圧迫感を軽減するため、道路に面した1階部分を公開空地とし、町に対して開かれた建ち方を意識した。



## 集いと余韻の階

大宴会場 / 大階段 / 縁側  
大宴会場は途に応じて間仕切り可能な座敷空間としている。また、人が周囲との距離を保ちながら過ごすことのできる、約200㎡の広さを確保した。さらに、大浴場で入浴した後に一息つく場として、踏面450mmの、段の途中で腰掛けることのできる大階段を設けている。その先には開放的な縁側空間が広がり、室内の縁側とヌレ縁の双方を設けることで、気候や天候に左右されることなく海の景色を楽しめる場とした。



## 訪れが始まる岸辺

宇和島は、探検・小型船が立ち寄りとなる海域として知られており、船で訪れる需要が高い地域である。そこで、海からも気軽にアクセスできる導線として船着き場を計画した。また、津島は釣りを目的に訪れる人が多い地域であることから、船が着いていない時間帯には釣り場としても利用できるようにした。これにより、移動手段としての役割にとどまらず、地域の魅力を体験できる場となることを目指す。

## 海に浸る食の風景

レストラン / 厨房  
建物に入ると、すぐにレストラン空間が広がる。エントランスダイニング、半個室ダイニング、海景ダイニングという、異なるレベルの空間を連続させている。エントランスダイニングは階段を利用せずアクセスできるため、歩行に問題をもつ人でもレストランを利用しやすい。半個室ダイニングは、人目を気にせず落ち着いて食事を楽しめる空間としている。階段を降りた先に位置する海景ダイニングは、開放的な吹き抜け空間とした。床面は海面から約3060mm下げ、床から天井まで高さ約7000mmの壁面を全面ガラス張りとし、海中の景色を体感できる場としている。

